ドリス・シャドボールト著

「エミリー・カーの芸術」

東京都立武蔵高校教諭　浅井　晃

バンクーバー島の南端にあるビクトリア市は、風光明媚、その英国風のたたずまいで観光客を集めているが、バス発着所から歩いて数分のところにあるエミリー・カーの家を訪れる人はまれである。蠟人形館やエンプレス・ホテルで時間をつぶす暇があったら、ぜひ訪れたいところである。

エミリー・カーは、一八七一年、英国人移住者を両親としてこの地に生れた。ビクトリア朝仕込みの専制的父親の血を受けたとされる末娘のエミリーは、大ぜいの姉妹の中にあって、ただ一人いこじな反逆児であった。

彼女は、近くのビーコンヒル公園で遊んでくれた母親とは十四歳して死別し、二年後には父親をも失った。絵の好きな彼女は、一番上の姉の支配する家を嫌って、十八歳の時サンフランシスコに修業に出かけた。小さな美術学校で三年余り学んだが、ヌードモデルの写生を拒否して逃げ出すという娘だった。

帰国後も家族としっくりいかず、子供に絵を教えて貯めた資金で英国に渡り、主としてロンドンで学ぶが、結核にかかり、渡英五年にして、失意のうちに帰国するのである。

このあたりまでについては、多少の誇張はあるが、自叙伝と言われる「Growing Pains（苦難の修業時代）」（一九四六年）に詳しい。彼女は文才にも長け、画家としてよりも作家として先に有名になった。第一作の「Klee Wyck（クリー・ウイック）」（一九四一年）は、インディアンとの交流を描いたもので、ノンフィクション部門でカナダ総督賞を得ている。

これらの著作は、心臓病を病んで写生旅行が困難になり、絵筆を持つことすら医者に禁じられた晩年の、やむにやまれぬ創作活動であった。そして自叙伝の発刊も、第二次世界大戦の終戦も待つことなく、一九四五年春、孤独のうちに七十四歳の生涯を閉じたのである。

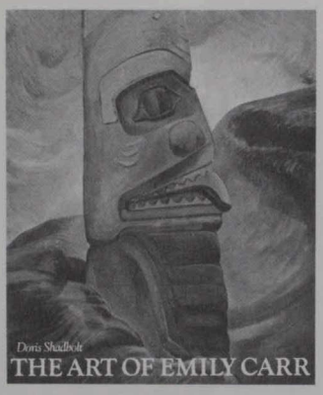
彼女の絵の多くが、今カナダ東部にある。保守的な土地柄だった西部では売れなかったからだ。トロント郊外のクラインバーグの森を訪れるとよい。山小屋風のマクマイケル美術館に、トム・トンプソンをはじめとする七人グループの作品に混じって、彼女の、たとえば海に臨むビーコンヒルの丘の絵を見ることができる。

またバンクーバーやビクトリアの美術館（彼女の時代には無かった！）を訪れれば、歯をむき出したビーバー像や、帯状になってのたうつ森を描いたキャンバスを見ることができるだろう。

しかしながら、今度、個人所有の多くの作品も含め、カナダ各地に散らばっている作品が、二六センチ×三一センチ、二百二十三ページの大冊にまとめられて出版されたことは、彼女の芸術の全貌を一時に鑑賞するという大へんな贅沢を可能にしたのである。

著者のドリス・シャドボールト女史は、単なる美術批評家ではなく、トロント、オタワ、バンクーバーなどの美術館に歴任し、各種の芸術擁護団体のために献身する美術の専門家で、エミリー・カーの良き理解者である。

この大著のなかで、彼女はまずエミリーを生んだビクトリア、ひいてはカナダ太平洋岸の十九世紀後半の情勢を紹介し、ついで画家としての彼女の成長を、初期から終期まで九つの時期に分け、百五十枚の原色版、六十枚の白黒版複製画を用いて説明している。



エミリー・カーを知らぬ人も、ページをめくるにつれ、その異常な生気を発する芸術のとりこになることは必定である。

エミリー・カーとインディアン主題との出会いは、一九〇五年、イギリスからの帰路、カリブー地方を旅行した時に始まる。サンフランシスコやロンドンへの遊学は、都会的なものへの嫌悪を強く彼女に植えつけていた。そればかりではない。イギリスから見たカナダは植民地にすぎず、カナダ人は「植民地人」と呼ばれていた。

イギリスの保守的な画壇からも多くを学ぶことができなかった彼女は、帰国すると、カナダの自然と、カナダの先住民インディアンの世界の中へ、急速にのめり込んで行く。インディアン部落、トーテム・ポール、ハウスポストなどを、憑かれた者のように描きつづけるのだった。

しかし、内に神性を秘めたインディアン芸術に対しながら、彼女は自分の技法の限界を感じた。そこで一九一〇年、フランスへ学びに出かけることになる。そこには、まさに二十世紀にふさわしい芸術運動があった。ルドン、ルオー、マチス、ピカソらが、すでにサロン・ドートンヌを中心に活躍していたのである。一年余りのパリ滞在の後、生気に満ち溢れて帰国する。この時期の作品に、フランス後期印象派の強い影響を見ることができる。

故郷で仕事を再開したエミリーは、保守的な地元美術家たちの嘲笑の的となっていた。画塾の教師もやめさせられ、第